

「安全」の証明による「安全な米」の生産のために

GAPについて

○昨年の東日本大震災以来、農産物に対する「安心・安全」が大きく取り上げられています。農薬飛散や不適切な農薬使用による残留農薬や、4月からの放射性セシウムの基準値が厳格化されるなど、消費者にとって食の安心・安全については特に関心が高まっています。

そこで、各作業における安全性を証明する手段として「GAP：農業生産管理工程」の取り組みが進んでいます。

適切な農場管理をするための4つの管理点の内容（一例）

農産物の安全……農薬保管と農薬使用時期・回数、遺伝子組換え作物、病害付着等
 環境への配慮……水と土保全、農薬散布方法、ゴミの分別、燃料、希少生物保護等
 生産者の安全と福祉……圃場や作業場の危険箇所、健康管理、農薬散布時の安全等
 農場管理と販売管理……圃場毎生産管理、収穫～出荷生産圃場明確化、販売保管等

できることから取り組みましょう

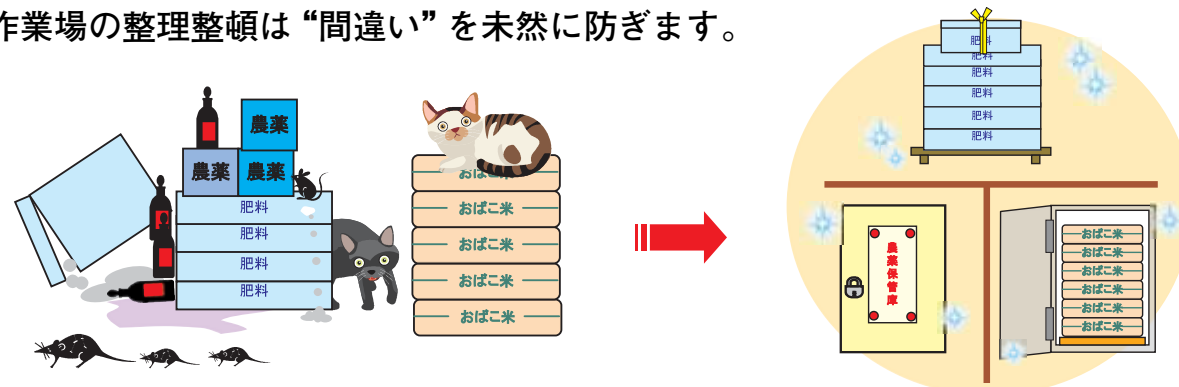
① 農薬使用時は必ずラベルの確認！使用後は散布記録を残します！



農薬には**使用量・濃度・使用時期・総使用回数・登録作目**などが記載されており、これらを守ることが基本です。

農薬を使用する際は、**周囲の環境や作付け野菜等に配慮し（ドリフトの未然防止）、**散布後は必ず**散布記録（使用農薬・散布量等）を残す**ように心掛けましょう。

② 作業場の整理整頓は“間違い”を未然に防ぎます。



上記のような状態を放っておきますと、使いたい時に資材が見あたらなかったり、農薬がこぼれたりします。また、農薬には一見ただけではいつ使うものなのか分からないものもありますので、整理整頓を心掛け、間違った使い方をしないようにしましょう。

適期の田植えで初期生育確保!!

～水管理で分けつ促進&きれいな田んぼを作ります～

これまでの作業進捗状況

春先の低温や融雪の遅れ、4月3～4日の強風被害の影響等により、作業進捗は平年よりやや遅く推移しました。

本年の播種作業は、始期が4月21日（平年4月19日）、盛期が4月26日（平年4月23日）、終期が4月30日（平年4月29日）でした。

耕起作業は、始期が4月30日（平年4月29日）、盛期が5月7日（平年5月4日）でした。

播種期、出芽期は高温傾向にあり、特に4月29日から5月2日に高温で経過したことから、出芽不良や苗ヤケが散見されました。

温暖な日の田植えで活着促進!

- ・苗の活着は気温・水温が高いほど早くなります。
- 1. 田植えは、日平均気温で稚苗13℃、中苗14℃以上の日とし、できれば日中の最高気温が20℃以上の日に実施します。
- 2. 最高気温が15℃を下回る場合は田植えを極力控えます。
- 3. 活着・発根は、苗の栄養状態にも左右され、葉色が薄い場合は、田植え7～3日前に追肥を行い活着（発根）を促します。

例

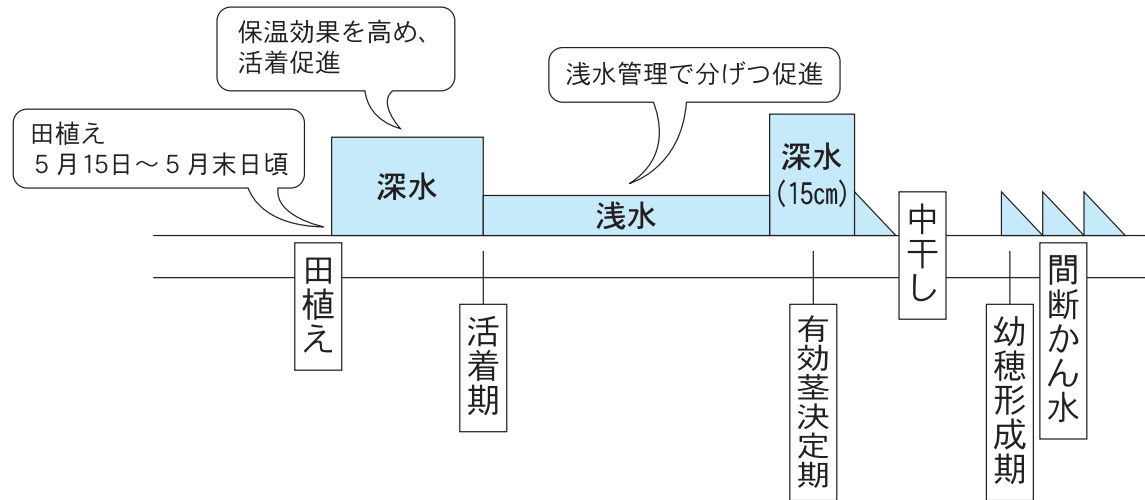
肥料名	現物量	水の量(1箱あたり)	希釈液投入量/使用箱数
液肥 2号	10ml	1ℓ	20ℓ/20枚
サイコー12号	8g	—	160g/20枚

○田植え作業の留意点

項目	設定	留意点
基肥量	地域基準値	茎数がとれにくい場合は基肥量を窒素1kg程度増施します。
栽植密度	60～70株/坪	茎数がとれにくい場合は70株/坪を目安にしましょう。
植付本数	稚苗：4～5本/株 中苗：3～4本/株	生育のばらつきを少なくするために植付本数を守りましょう。
植付深さ	2～3cm程度	植付が深すぎると茎数が増えにくくなります。初期茎数を確保するために植付深は稚苗で2cm、中苗で2.5cm程度とし、3cm以上の深植えにしない。

田植え後の水管理 ～適切な水管理で活着・分けつの促進をしましょう～

- ・苗の活着は気温、水温とも高いほど早くなります。田植時期の水温は気温に比べ3～4℃高いので、田植直後から活着まで（通常は4～5日）は、保温効果を高めるため、4cm程度の湛水を保ちます。
- ・除草剤を散布するときは成分の拡散性を高めるため、粒剤で水深3～5cm程度、拡散性剤（フロアブル・ジャンボ剤等）で5～7cm程度の湛水状態で行い、田面が露出しないようにします。
- ・分けつ発生に適する水温は日平均23～25℃で、日中と夜間の水温の日較差が大きいと促進されます。
- ・日中の気温が15℃以上の日は浅水、低温時には深水とし、水温・地温の上昇に努め、分けつの促進を図ります。



直播播種のポイント（カルパーコーティング・土中条播）

- ・播種前に必ず播種機の落下テストを行い、目的の播種量に設定します。また、詰まり等による未播種条が出るのを防ぐために播種ロール部分の掃除と点検は随時行ってください。
- ・播種前に落水し、播種溝が直ぐに埋まらない程度に土壌を落ち着かせます（土壌タイプにもよりますが、午前の播種の場合は前日の夕方、午後の播種の場合は当日の早朝に落水します）。
- ・好適出芽には播種後10日間の平均気温14℃以上を確保されることが必要となります。また、播種深度は0.5～1.0cmを目標とします。

落水出芽法の留意点 ※鉄コーティング、乾田V溝では、播種後の水管理が異なります。

- ・落水出芽法は、播種深度に注意してください（下表参照）。
- ・土壌を酸化状態に保ち、出芽を促進するため、播種後7日～2週間程度の落水管理を徹底します。

表. 播種条件が落水出芽処理に及ぼす影響

効果のある播種条件	播種深度	0.3～1.0cm
	播種後20日間の平均気温	13.5～16.0℃
効果のない播種条件	播種深度	0.3cmより浅い、1.0cmより深い
	播種後20日間の平均気温	16.0℃以上

葉いもち予防対策 ～早期発見・早期防除が鉄則！～

オリゼメート粒剤の散布適期と留意点

- ・育苗期の箱処理剤体系や側条施用体系を実施していない圃場は、必ずオリゼメート粒剤を散布します。
- ・オリゼメート粒剤は6月15日頃（12日～18日）に散布します。



ほ場内でいもち病発生を確認したら

持ち込み病斑や圃場の余り苗等からの伝染を早期に発見した場合は、速やかな防除対応が必要です。

○注意!!

本田で持ち込み等による病斑を発見した場合は、直ちに**予防剤と治療剤の混合剤（ブラシン剤）の茎葉散布**を行い、その後必要に応じて**ビーム剤**を追加散布します。

残った雑草は中期剤で叩く!! ～取りこぼした雑草は生育の障害や害虫のすみ処になります!!～

区分	除草剤名	使用時期	使用量(10a当)	使用回数	使用上の注意(収穫前日数)
中・後期剤	マメットSM1 ^キ 粒剤	移植後20～30日(但し、ノビエ3.5葉期まで)	1kg	1回	(収穫90日前まで)
	フォローアップ1 ^キ 粒剤	移植後25日～ノビエ5葉期まで	1kg	1回	(収穫60日前まで)
	クリンチャーバスマE液剤	移植後15日～ノビエ5葉期まで	1,000cc	2回以内	水70～100Lで希釈、落水状態で散布(収穫50日前まで)
	バサグラン粒剤	移植後15日～50日まで	3～4kg	2回以内	落水状態で散布(収穫60日前まで)
	バサグラン液剤	移植後15日～50日まで	500～700ml	2回以内	水70～100Lで希釈、落水状態で散布(収穫50日前まで)
	ヒエクリーンバサグラン粒剤	移植後15日～ノビエ4葉期まで	3kg	1回以内	ごく浅い湛水で散布(収穫60日前まで)
ヒエ専用	クリンチャー1 ^キ 粒剤	移植後7日～ノビエ4葉期まで	1kg	2回以内	(収穫30日前まで)
	クリンチャーEW	移植後20日～ノビエ6葉期まで	100ml	2回以内	水25～100Lで希釈、展着剤を使用して落水状態で散布(収穫30日前まで)
	ヒエクリーン1 ^キ 粒剤	移植後15日～ノビエ4葉期まで	1kg	1回以内	(収穫45日前まで)

虫害は被害が拡大する前の防除を ～早期発見・早期防除が決め手です～

- ・6月上旬から発生する害虫は以下の剤で防除しましょう。

害虫名	薬剤名	希釈倍数・散布量(10a当)	散布時期
イネアオムシ(フタオビコヤガ)	トレボン粉剤DL	3kg	第1世代 5月下旬～6月上旬 第2世代 7月上旬
イネミズゾウムシ	シクロサルU粒剤2	1.5kg	6月上旬
イネドロオイムシ	トレボン粉剤DL	3～4kg	6月中旬
ニカメイガ(ニカメイチュウ)	スミチオン粉剤3DL	3kg	第1世代 6月中～下旬(茎葉散布の場合)